

最近の症例から (19) —咬筋部勃起性血管腫—

多武保明宏, 山本雅也, 黒岩博子

松本歯科大学 口腔外科学第2講座 (主任 山岡 稔 教授)

井口光世

諏訪湖畔病院 歯科口腔外科 (主任 井口光世 部長)

患者: 23歳 女性.

初診: 平成6年7月22日.

主訴: 右側頬部の膨隆.

家族歴および既往歴: 特記すべき事項なし.

現病歴: 平成2年頃より右側頬部の膨隆に気づいていたが, 大きな障害が無いため放置していた.

その後, 膨隆が徐々に増大してきたために某歯科医院を受診し, 当科を紹介され来院した.

現症

全身所見: 体格中等度, 栄養状態良好にて他に特記すべき事項なし.

局所所見: 下顎安静位では, 顔貌左右ほぼ対称性であったが, 咬みしめ時に右側咬筋部に拇指頭大

の膨隆を認めた(写真1). 膨隆部は直径約2 cm 大の境界明瞭な類円形, 弾性軟で, 拍動は認めなかった. また, 両側顎下リンパ節は大豆大を各一個ずつ触知し, 可動性で圧痛を認めなかった. 口腔内においては腫瘤を触知せず, 唾液の分泌も正常であった.

臨床検査所見: 特記すべき事項なし.

画像所見:

単純X線所見: 異常所見は認めなかった.

超音波断層像所見: 右側咬筋部と皮下の間において, 15×15×5 mm 程度の境界不明瞭で内部が比較的均一な低輝度領域を認めた(写真2).

MRI 所見: T₁強調像では, 腫瘤部は皮下脂肪より低信号で, 咬筋組織とほぼ同信号を呈し境界は不明瞭であった(写真3-A). T₂強調像においては高信号を呈し, 境界明瞭で咬筋部と皮下の間を認めた(写真3-B).

臨床診断: 右側咬筋部勃起性血管腫



写真1: 初診時顔貌写真(咬みしめ時)

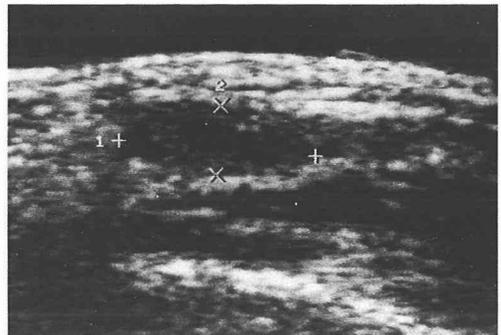


写真2: 超音波断層像

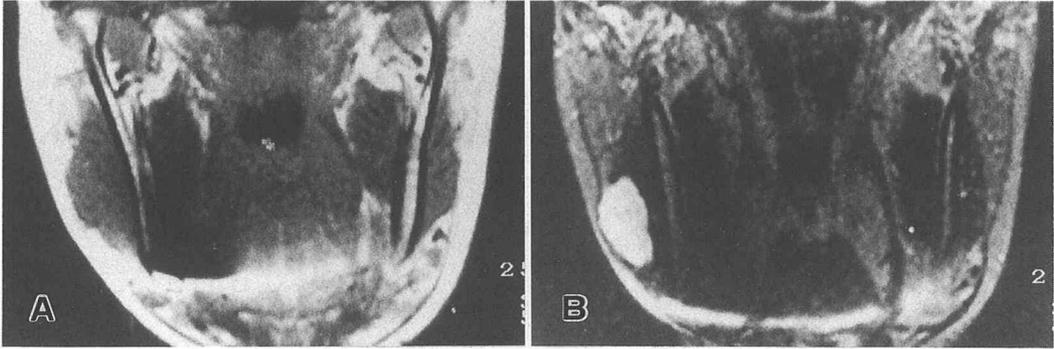


写真3 : A ; MRI T₁強調像
B ; MRI T₂強調像